

短篇小説

小春日

堀内新泉

一、
たしか、僕が、十歳の年で、時候は、何んでも家の庭に、藤や、躑躅の咲いて居た時分だと、おぼろげながら覚えて居る。

一日、學校から歸つて、平生のように、復習をした後に、その日も亦、僕はすぐに、正木の家に飛んで行つて、

「叔母さん！」
と元氣よく呼ぶと、『オ、川田の坊ちゃん入らつしやい！』と云ふように、お馴染のボチ（犬の名）が、大きな尾を振り／＼出て来て、僕の顔を仰いで立つた。

この老犬を相手にして、僕は、お玄關の前で遊んで居ると、奥から、此方へ聲音がして、
「今、孝ちやんの聲がしたようだが、それとも、

私の氣の所爲だつたか知ら』
と云ふ聲諸共お障子が開いた。

二、

僕は、ボチの頭を、おさへた儘振向ひて、
「叔母さん！」

「オ、やつぱし、孝ちやんでしたのねー！』
と云ひ／＼叔母さんは、笑顔をなすつて、式臺に一足、お下り成すつた。

僕は、すぐ叔母の傍に行かうとすると、『坊ちゃん、最少し遊びませう』と云ふように、ボチは、僕の背中に飛びついた。

「コレ、ボチや！』
と叔母さんは、お叱り成すつて、

『さあ、孝ちやんや、お上りなさい！ わなたのお好きなお菓子があつてよ。昨日は、何うして、入らつしやいませんでした？ 叔母さんは、待ち焦れて居ましたのに』

僕は、編上げの靴を脱ぎながら、
「昨日はね、多美と、祖母さんのお墓に參つたから來なかつたの』

「オヤ、まあ、左様でしたか。さ、そのお靴を、此方へ納つて置きましようね、また、ボチが持つて行くといけないから」

ボチは、お宮の前に在る、唐獅子のような鹽梅式に、御影の敷石の上に座つて、尾に石を掃きながら、「私も坊ちやんと御一緒に奥に行つて、お菓子を買きたいな！」と云ふように、じろくくと、僕の顔を視て居つた。

三、

幾間か、過ぎて、叔母さんのお部屋に行くとき、大きな紫檀の茶棚から、割つたらトロリと牛乳の垂れさうな、綺麗なく花の附いた、僕が、大好物のお菓子が出た。

「叔母さん、有りがたう！」

とも何んとも云はず、両手に抱へて食べ始めると叔母さんはニコくと、僕の顔を御覧なすつて、「孝ちやんのお顔は、ほんとに、何時見ても可愛いのね！」

とおつしやつた。

この叔母さんは、僕に取つては、まるで、眞實

のおつ母さん見たようだが、無論、眞實のおつ母さんでも無ければ、實は叔母さんでも無いのだ。それが、何うして、僕を、こんなにか愛がつて下さるのか、僕にも、解らないのであるが、僕が、この親切な叔母さんに就いて、知つて居る丈の事を云へば、先づ斯うである。

叔母さんの家と、僕の家とは、太く懸意な間柄、叔母さんの家も、立派な家、僕の家も、立派な家であるが、僕の家には、僕を長子にして、男の子が四人もあるのに、叔母の家には一人も無い。たい、これ丈か、叔母さんの家と、僕の家との異つた所で、叔母さんが、僕を、子のように可愛がつて下さるのも、また、その所爲であらう。

併し、それにしては、一ツ合點の行かぬことがある。たい、向ふに子のないために、此方を可愛がつて下さるのなら、僕達兄弟四人を、皆、おなじように可愛がつて下さりやうなものだ。

それぢや、叔母さんは、僕の弟達は、可愛がつて下さらぬかと云ふと、そんな分け隔てをするような叔母さんではないが、併し、何うやら弟達に

對しては、僕を可愛がつて下さる程ではないよう
だ。

そののみならず、僕には、まだ、何うも、合點
の行かぬことがある。

それは、僕のおツ母さんに就いての話だ。

僕のおツ母さんも、悪いおツ母さんではないが
何うかすると、小供心にも、『はア、可怪いな！』
とおもふ、事がないでない。ぢやア、おツ母さん
が、僕を憎みでもするかと云ふに、僕のおツ母さ
んは、そんなおツ母さんではないが、でも、三人
の弟達程には、僕を可愛がつて下さらぬようであ
る。

四、

それから、最一ツ、僕には、何うも、合點の行
かぬことがある。

それは、今、二月ばかり前に亡くなつた、僕の
祖母さんに就いての話だ。

元來、僕の、祖母さんと云ふ人は、勝れて、子
供を可愛がる人であつたが、その中にも、これが
又矢張、今おもふと、僕達を、いくらか區別して

居たようだつた。

それかと云つて、無論、何れもかなしく可愛孫
のこと、僕丈を可愛がつて、弟達三人を、憎むと
云ふ譯ではなかつたが、でも、何うかすると全く
そんな氣味がないでもなかつた。亡くなる少し前
の夜に、此家の叔母さんと、多美（僕の家には、僕
の生まれぬ前から居るといふ、年間な女中だ）と
を招いて、僕の外には、誰も居ない所で、僕を指
して、

『何分！』

と云つて、涙を流して拜んだのを、僕は、身に染
みて覺えて居る。

これは、僕のひがみかもしらないが、多美に就
いても、家で、肝心な、お父さまに就いても、不
思議と云へば、いろ／＼不思議なことがあるが、
不思議でないと思へば、また何んの不思議なこと
もわりはせぬ。おツ母さんが少し位、何うした所
で、それは當然さ、僕が、一番大きい兄さんだも
の！

五、

僕は、今日、叔母さんの家に来る道でも、前々おなじような事を思つた。

けれども、一目、叔母さんのお顔を見ては、何んとなく、嬉しさが胸一杯になつて、そんな事は忘れて仕舞ひ、充分、好きなお菓子を食べて、最う、見るのもいやに成つたので、食べかけた一ツをもつて、これは僕と仲好しのポチに與らうと思ひ、叔母さんのお部屋を出ようとする時、ポチははや、お椽先に來て居つて、

「坊ちゃん、此です！」

と云ふように、ワンと吠えた。

「まあ、ポチの伶俐なことを御覽なさい！ 何時も、孝ちゃんに頂くものだから」

と云つて、叔母さんは、お笑ひなさる。僕も感心して、

「やア、最う來てるな！」

と云つて、少し割つて投げて與ると、ポチはペロリ、

「坊ちゃん、酷いね！ たつた、これッばかり」と云ふように、ゆらりと房なす尾を振り、僕

の顔を、しげしげと視て居る。

僕は、一番、からかつて遣らうと思ひ、お菓子の残りを兩手に持つて、跳りながら見せてやるとポチも、僕とおなじように頭を張つて、ワン／＼吠える。

「さあ、これ與るから、チン／＼しろ！」

老犬は、僕の命令に従つて、ズツと立つて前脚を折つた。

「ポチ、何んです！ お前、最う、好いお老爺さんのくせに、チン／＼でもあるまいよ」

と云つて、叔母さんは、お笑ひなすつた。

すると、ポチは、極り悪さうに、チン／＼をよして。

「奥さま、御免なさい！」

と云ふように、俯目になつた。

不憚さうだつたから、僕は、残らず投げてやつて、スグお庭に下りて、今日も亦、ポチを相手に追ひつ追はれつして、この上もなく、愉快に遊んで居つた。

その中に、叔母さんの姿は、何時の間にか見え

なく成つたが、すぐに又、僕は見知らぬ他所の小母さんと二人で、お座敷に見はれた。

僕は、ボチと、藤の花の鮮かに映つた、池の周を飛びながら、他所の小母さんに、一寸お叩頭した。

「まわ、少しの間に、大層、おみ大きくお成りですことねえ、彼れが彼のお兄さんですか」

「左様ですよ」

「まわ、ねえ！」

その時、丁度、池の此方に廻つて来た。僕を見て、

「坊ちゃん、まわ、一寸、此處に入らッしやいな

！あなた、この小母さんを覚えて居らして？

母さんが御覽でしたら、嘸、まわ、お喜びでしようね！」

僕は、はッ！と思つて振り向く。同時に、叔母さんは、手を振つて、

「何して、中々、耳が敏うございますからね！」と低聲で云つた。

僕は、おもはず、立縮んで居ると、叔母さんは

其處から僕を逐うように、

「まわ、孝ちゃん、最つと、ボチとお駈けなさい！」

僕は、また、一散に駈出したが、心は、或る疑ひに満たされて居つた。(つづく)

●裸体生活の主張者

人間の衣服を被るは天賦の性質を傷ふものにして虎列拉、肺結核、質扶斯等一切は此の天賦の性に悖る刑罰なりと主張し、自ら裸体の儘にて信徒を募りつくあるサー、エフ、シヤープはヤクラハマにて數回拘留せられたるに拘はらず五十餘名の信徒と共に決して衣服を着せず官憲も之を如何ともする能はざりしが此程太平洋沿岸に新エテンの樂園を求め裸体村を組織せんとて出發したるを以て再び官憲の爲に禁錮せられたり、去れど彼等は幾度拘禁せらるゝとも此主張を棄てずと宣言し居るとぞ北雷主義も物かは